

■海國雙語六の解説

本双六が発行されたのは明治 29(1896)年で、日清講和条約（下関条約）が調印された翌年である。日清戦争の海戦の戦場が登場するなど当時の状況をよく反映している。

明治政府の富国強兵政策の中で、海國雙語六の最上部に制作目的が大きく書かれている。

「此雙六は我國の幼年子弟をして海事思想を涵養せん為め 軍事的と商業的とに拘わらず 近世海上に関して顕はれたる偉列の事績を圖 (=図と) して考案したるものなり 輪郭を地球に擬して上りを旭日としたるは日本が世界の海上権を握り國光八表に輝くことを意味したるなり 又圖中の圈下に山田長政を記して暹羅 (シヤム) の處には圖書のみにして山田長政を記入せず 故に遊戯者は其事實を記憶せざるべからず 是れ開發的に事實を記憶し且つ地理的の觀念を起さしめん為めなり」

日本という新しい国家意識のもと、“海上権を握り國光八表 (国威が世界) に輝く”ために、双六の持つ広告宣伝機能が利用されている。江戸時代にはなかった国家による国威発揚のための双六活用を例証するものである。

双六のルールは、双六の最下部に記されている「心得」の通りだ。

「心得：此雙六ヲナスニハ先ス別冊圖解ヲ一閱スルヲ要ス 書中例ヘバ 三山田長政トアリテ 全圖書ニ山田長政ト記セシ處ナシ 故ニ山田長政ハ暹羅ニ渡ルト言フコトヲ記憶シテ 己レノ牌ヲ投スベシ 若シ誤ッテ他ニ投スル時ハ 罰トシテ一回ノ休止ヲ命スベシ 又遊戯者中一人ノ試験者ヲ定メ遊戯者ガ牌ヲ投スル際 書中ノ事實ヲ質問シ速答スルヲ得ザル者ニ随意ノ罰ヲ命スルモ可ナリ」

別冊の図解が入手されていないので、正確にはわからないが、筆者の解釈を加えながら、遊びの手順を想像してみた。

② サイコロの出目に従って飛ぶ、飛廻り双六である。

② 16のマスには11人の人物の絵と15の地名と会社名(三菱)がワンセットで描かれている。マスに描いてあるサイコロの出目の指示がどのマスである。マスの絵は歴史上の事件や肖像画などに似せて描いてあるので、それを以て推論をしていく必要がある。人名や地名の背景やエピソードを理解していなければ進むことができない。海事思想の涵養も楽ではないのだ。 ※錢屋五兵衛が「歐洲と濠州」のマスでいいのか悩ましい。

各マスの出目に示されている人物を簡単に説明しよう (双六の構成はP4参照)。

- ・田中鶴吉・・・生年：安政 2(1855)年・没年：不詳。明治初期、日本で天日製塩法を企てた事業家。11 歳で家出し米国商船のボーイとなり、のちサンフランシスコの商館に勤めた。1873 年、天日製塩法の習得を志して新鋭製塩会社に入社、明治 12(1879)年たまたま訪れた千葉県の前田喜代松(酪農事業の先駆者)の勧めで帰国し、東京深川地先に試験塩田を築造した。
- ・魚屋(ちや)助右衛門・・・生没年不詳。近世初頭の堺の豪商、貿易家。別名呂宋助左衛門。堺戎町の豪商で、文禄 2(1593)年、小琉球(呂宋・現在のフィリピン諸島)に渡航し、珍奇の貨物を仕入れ、翌年帰国。堺代官石田政澄を介して豊臣秀吉に唐傘・真壺などを献上した。特にその壺は公家・武将間に茶の湯が隆昌を極めていたことから珍重され、かつ高価な茶器として、秀吉に愛蔵され、呂宋壺の名で諸大名や家臣にも分配された。
- ・岩崎彌太郎・・・生年：天保 5 (1835) 年・没年：明治 11(1885) 年は。日本の実業家。現在の高知県出身で、34 歳の時、大阪市で現在の三菱財閥(現：三菱グループ)を創設した。海運業においても国内外の熾烈な競争を乗り越えて業容を拡大する。
- ・近藤重蔵(こんどうじゅうぞう)・・・生年：明和 8 (1771) 年・没年 文政 12 (1829) 年は、江戸時代後期の幕臣(旗本)で探検家。5 度にわたって蝦夷地探検をおこなった。間宮林蔵、平山行蔵とともに“文政の三蔵”と呼ばれる。択捉島の内国化、アイヌ民族の和風化の政策を推し進めたと言われている。
- ・郵船會社・・・明治 26 (1893) 年、株式会社として日本郵船株式会社が誕生し、日本初の遠洋定期航路としてボンベイ(現・ムンバイ、インド)航路が開設される。
- ・濱田彌兵衛(はまだやひょうえ)・・・生没年不詳。江戸時代初期の朱印船の船長。長崎の人。1627 年に起こったタイオワン事件(※)の実行者。
 ※タイオワン事件：寛永の頃までに日本では朱印船貿易が盛んになっていたが、その交易先のひとつで明国との非公式な貿易を行う際の中継基地的な重要性があったのが台湾に高砂だった。そこにオランダ東インド会社が進出してこれを占領(1624 年)ゼーランディア城を建てこの地における交易には一律 10%の関税をかけはじめた。寛永 4 年(1627 年)、長崎の貿易商・末次平蔵の朱印船の船長だった彌兵衛は、幕府の後援をうけて、オランダ総督ピーテル・ノイツを人質にし、オランダに関税撤回を要求。オランダはこれをのみ、高砂を自由貿易地にすることに成功した。
- ・天竺徳兵衛・・・生年：慶長 17 (1612) 年・没年：不詳。江戸時代前期の播磨国高砂(現在の兵庫県高砂市)の人。日本人の海外渡航が禁止される以前の寛永年間、10 代で朱印船に乗り、当時「天竺」と認識されていたシャム(当時はアユタヤ王朝)へ 2 度にわたって渡航した。晩年に剃髪して宗心を名乗り、かつての海外渡航での見聞をまとめたと言われる。
- ・郡司大尉・・・生年：万延元(1860)年・没年：大正 13 (1924) 年。日本の海軍軍人、探検家・開拓者。開拓事業団「報效義会」を結成し、北千島の探検・開発に尽力した。

- ・支倉常長・・・生年：元龜2（1571）年・元和（1622）年。安土桃山時代から江戸時代初期にかけての武将（仙台藩伊達氏家臣）。キリスト教洗礼名はドン・フィリッポ・フランシスコ・ファセクラ。慶長遣欧使節団を率いてヨーロッパまで渡航した。遣欧の目的は通商交渉とされているが、エスパーニャとの軍事同盟によって伊達政宗が倒幕を行おうとした説もある。エスパーニャ国王フェリペ3世とローマ教皇パウルス5世に謁見した。ローマでは市議会から市民権と貴族の位を認めた「ローマ市公民権証書」を与えられた。有色人種として唯一無二のローマ貴族、びフランシスコ派カトリック教徒となった。元和6年に帰国したが、日本では既に禁教令が出されていた。そして、2年後に失意のうちに死去した。
- ・紀伊國屋文左衛門・・・生没年不詳。江戸時代、元禄期の商人。半ば伝説上の人物である。紀州熊野の出身で、紀州ミカンの江戸出荷と木材の買占めで巨富を築いたとされる。
- ・山田長政・・・江戸初期、シャム（タイ）の日本人町で活躍した。駿河国の人。慶長末頃シャムに渡り、アユタヤの日本人町に居住、その長となり貿易に従事するとともに、内戦・外寇に功を挙げて国王の信任を得、王女を娶り王族の一員となった。王の没後、幼王を補佐し、王位継承の争乱を平定して威望を高めたが、王族にうとまれ、毒殺された。寛永七（1630）年に没。
- ・銭屋五兵衛・・・生年：安永2（1774）年・没年：嘉永5（1852）年。江戸末期の豪商。加賀宮腰（石川県金沢市）の人。大船三十数艘で上方から北陸、東北、蝦夷地の各港を往来して通商貿易を行ない、巨利を得た。その間、加賀藩の財政困難を助け、御用商人となる。海外交易の必要性を認識しており、蝦夷地の樺太ではアイヌを通じて山丹交易を（礼文島には「銭屋五兵衛貿易の地」の碑が建てられている）、国後場所や択捉場所に属した択捉島近海ではロシアと抜荷取引し、また自ら香港やアモイまで出向いたり、アメリカ合衆国の商人とも交易したといい、オーストラリアのタスマニア島には領地を持っていたともいう伝説すらある。河北潟の干拓にからむ事件で捕えられ、獄死した。
- ・威海衛（いかいえい）・・・中国、山東半島北岸にあり、渤海（湾をおさえていた要塞。明代初期、倭寇に備えて衛所を置いたのに始まり、清代末期、軍港として整備され北洋艦隊の根拠地となった。日清戦争以後、日本が占領。（1898年からイギリスが租借。1922年のワシントン会議を経て、1930年に中国に返還された。）
- ・黄海・・・中国大陸と朝鮮半島の間にある海。黄海海戦とは、日清戦争中の1894年9月、日本連合艦隊と清国北洋艦隊との海戦のこと。日本の無傷に比し清国は主力艦5隻を失い、制海権は日本に帰した。
- ・豊島（ほうとう）・・・朝鮮江華湾の島。豊島沖海戦（ほうとうおきかいせん）とは、明治27（1894）年7月、日清戦争の戦端を開いた海戦のこと。日本連合艦隊の第1遊撃隊は京畿道西岸の豊島沖で清国軍艦濟遠・広乙に遭遇、砲火を交えて広乙を座礁・自滅させ、濟遠を敗走させた。またこの海戦中、清国軍艦操江が清国兵を満載した高陞号（こうしょうごう）を護送中であるのにも遭遇、操江を降伏させ、高陞号を撃沈した。この海戦で増援軍を失った清国軍は、成歓（せいかん）の戦いで敗北した。

■海國雙語六の構成

上り（國光八表）			
威海衛	臺灣 （濱田彌兵衛）	暹羅:シヤム （山田長政）	黄海
歐洲と濠 （錢屋五兵衛）	南洋	紀伊 （紀伊國屋文左衛門）	豊島
米國 （田中鶴吉）	印度 （天竺徳兵衛）	三菱 （岩崎彌太郎）	擇捉 （近藤重蔵）
千島 （郡司大尉）	呂宋：ルソン （魚屋助左衛門）	羅馬:ローマ （支倉常長）	振出シ 横濱 （郵船會社）